

聖書：使徒 26：24～32

説教題：私のように

日時：2014年10月5日

アグリッパ王の前におけるパウロの弁明を見て来ましたが、その結果はどうだったかが今日の箇所記されています。前回は触れたように、パウロはカイザルに上訴することによってローマ行きが決定していましたが、この時の弁明は裁判のためのものではありませんでした。これは新総督フェストに挨拶をしにやって来たアグリッパ王と妹のベルニケが、パウロの話を知りたいものと希望したことによって開かれた場です。パウロはこれを伝道機会ととらえて証しました。

まず最初に発言したのは、総督のフェストでした。彼は24節で大声で「気が狂っているぞ。パウロ。博学があなたの気を狂わしている。」と言います。ローマのお役人としてこの地に遣わされたフェストにとって、パウロの話は全く理解不能なものだったのでしょう。彼の関心は、この地をどう治めるかということです。そんな彼にとって、パウロの話はこれ以上聞いているのは我慢ならなくなって来た。全くナンセンスな話である！前の章の19節にあったように、フェストはパウロの主張はイエスが生きているという点にあるらしいことは分かっていたが、いざ話をじっくり聞いてみると、彼は大真面目に文字通りの肉体の復活のことを述べています。聞いていて彼が博学なのは分かったが、それが行き過ぎて頭がおかしくなったのではないか。こんな常軌を逸した話にいつまで付き合わなければならぬのか。もういいのではないか！そう思って止めに入ったのです。

ここに私たちの伝道やあかしは往々にして世の人々からこのように見られるということを私たちは思われます。特に超自然的なことを受け入れない人々にとってそうでしょう。復活なんかあり得ない。奇跡なんかあり得ない。また目に見える現実の生活のことにしか目をやらない人にとってもそうです。罪の赦しとか、永遠の命とか、天の御国といったお話は非現実的で意味のない話のように思われる。

こう言われてパウロはどうしたのでしょうか。彼はこれを恥ともしませんでした。彼は「私は、まじめな真理のことばを話しています。」と言い、26節で自分が今述べていることは世界の片隅で起こった出来事ではないと言います。ローマ人ならいざ知らず、この地方を治めて来たヘロデ家なら否定できない歴史的事実である。具体的にはイエス・キリストの地上の生涯、十字架、復活のことでしょう。そしてこれは長い歴史の中でユダヤ人が受けて来た神の預言の言葉に従った成就である、と。フェストは気が狂っていると言うが、開かれた心と目を持って見るなら、明らかにその真理が我々の前に提示されているとパウロは述べています。

ここに現実とは何かを巡ってのぶつかり合いがあります。この世の人々は基督教の福音を聞いて、非現実的な話と決め付けるかもしれません。良く調べもせず、超自然的なことはないのだという前提に立って、そう評価するかもしれません。しかしこれはこの世界の中で起こった出来事に立脚したものです。歴史の中で、時間をかけて与えられてきた聖書に従って、多くの人々が見ている目の前で行われたみわざに基づいています。その真理があまりにも素晴らしいので、パウロは熱心に語っているのです。「もし私たちが気が狂っているとすれば、それはただ神のためであり、もし正気であるとすれば、それはただあなたがたのためです」(Ⅱコリント 5:13)。私たちはここから改めて、主をあかしする時、人々からこのように言われ得ることを心に留めたいと思います。基督教の話を見まわると、少し気がおかしくなったのではないかと人々から思われる。パウロもそうでした。私たちはそのことに驚くことなく、ひるむことなく、自分の務めに当たりたいと思います。

さてパウロは 27 節からアグリッパ王に向かってアピールします。「アグリッパ王。あなたは預言者を信じておられますか。もちろん信じておられると思います。」これに対してアグリッパは、28 節でこう述べます。「あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている。」これはどういう意味でしょうか。しばしば言われることは、アグリッパはパウロの話をごくままで聞いて来て、思わず自分が説得されそうな状態にあることを認めたということです。さすがに公の場で「信じる」とまでは述べていないが、少なからず心が動かされていて、実はあと一步のところまで来ていた、と。ある英語の聖書はここを「もう少しでおまえは私をキリスト者にするところだった」と訳しています。しかし信頼できる世界の学者たちは、そういうニュアンスはこの原文にはないと指摘しています。アグリッパはここで好ましくない質問を受けたのです。預言者を信じていると答えれば、ではその預言者が指し示して来たイエスを当然信じるでしょう、とパウロにたたみかけられるに違いない。だからと言って、預言者を信じないと答えてしまったら、ユダヤ人にそっぽを向かれてしまう。このジレンマから逃れるためにアグリッパはパウロが語った言葉の少なさ、あるいは欄外にあるように時間の短さを問題にしたのです。そして「おまえはこの短時間の話で、私をキリスト者にしようとしている」と述べたのです。「キリスト者」という言葉は、アンテオケで外部の人たちからつけられたあだ名であったように、ここでも幾分軽蔑的なニュアンスでアグリッパは使ったのでしょうか。彼としては、フェストが「気が狂っている！」と評価するパウロの話に信じるつもりなどさらさらありません。心動かされてもいません。ただ大勢の人々がいる手前、時間の短さを理由にして質問をかわしたというのが実際だったのでしょうか。私たちとしては心血を注いだパウロのあかしを聞いて、少しはアグリッパも心動かされたという話の方を好むでしょうが、そうではなかったのです。アグリッパは拒絶したのです。

パウロは言葉を継ぎます。29 節：「パウロはこう答えた。『ことばが少なからうと、多からうと、私が神に願うことは、あなたばかりでなく、きょう私の話を聞いている人がみな、この鎖は別として、私のようになってくれることです。』」ここにパウロがアグリッパ王だけでなく、ここにいたすべての人の救いを願って証して来たことが示されています。彼の言葉の中で何と言っても注目を引くのは、「私のようになってくれることです」という部分でしょう。何と王様に向かって、囚人である者が「私のようになりたい」と言った。一体誰がパウロのようになりたいたいでしょうか。しかしもちろん、表面的な意味で言っているのではありません。パウロは「この鎖は別として」と言っています。つまり囚人として鎖につながれているという外側の姿ではなく、私自身そのものを、あるいは私が内に持っているものを見て欲しいと言ったのです。それは一言で言えば、キリストにある救いを受け取って喜んでいる自分の姿でしょう。パウロはその祝福について語って来ました。神の前に罪を赦される喜び、神の光の中へ入れられる喜び、神に立ち返って神と交わる喜び、死を越えて復活に至る喜び、そして罪による嘆きや悲しみの一切ない栄光の御国を受け継ぐ喜び…。パウロもかつてはこの世に多くの誇りを持っていました。イエス・キリストの素晴らしさを知るに及んで、それらは今やちりあくたのようなものでしかないと言いました。キリストを救い主として持つことは、それらと比較にならない、最高・最上の祝福にあずかることである。だからこの私のようになしてほしい、とパウロは訴えたのです。

ここで王と総督とベルニケ、および同席の人々が立ち上がります。そして互いに話します。「あの人は、死や投獄に相当することは何もしていない。」またアグリッパはフェストに「この人は、もしカイザルに上訴しなかったら、釈放されたであろうに。」と言います。議論していることは、為政者の立場からの善悪の判断です。彼は罪に定めるような人ではない、と。信仰的には何ら動かされていなかった。そしてパウロはいよいよローマへと送られることになるのです。

以上の箇所から私たちが学ぶことを最後に改めて三つ確認して終わりたいと思います。その一つ目は、私たちがあかしする場についてです。パウロは囚人の状態で 2 年間牢屋に入れられ、着飾った王たちの前に鎖につながれた状態で引き出されてあかししました。私たちは、あかしをするためには今よりもっと良い状況や環境が整ってから、と思いやすいものです。問題がなくなり、周りに反対者がいなくなり、外面的にも繁栄の状態に至ったら、初めて人様に何かを言える、と。しかしパウロはこの世のきらびやかさを見せつけられ、自らはみすぼらしい状況にある中であかしをしました。鎖につながれた囚人として、見世物として人々の前に引き出される状況であかししました。私たちも色々な状況に置かれます。しかし今は理想的な状況にないから、あかしはできないというの

ではありません。その置かれた今の状況、今の状態であかしすることができるのです。

それができるためのカギは何でしょうか。二つ目に心に留めたいのは、「私のように」と述べたパウロの姿です。私たちはとても自分にはそう言えないと思うものです。反対に「私のようにはならないで！」となら言えると思う。あるいは「私は見ないで、キリストを見て！」となら言える、と。しかし私たちは自分が立派だから、誇れる状態になったから、自分を見て！と言うのではありません。見てもらいたいのは、自分がどんな状況にあるにしろ、キリストの救いを喜んでる姿です。地上にあってなお罪との戦いや様々な課題があるけれども、それらすべてを解決してくださるキリストを持っていること、罪の赦しの祝福、神の光の中を歩む祝福、復活の希望を持っている祝福、御国に入る約束を頂き、その前味を味わう祝福…。これはクリスチャン全員がキリストから頂いている祝福です。その祝福を何よりも喜び、感謝して生きること。その時に、私たちは自分自身がどんなにダメであれ、「私のように」と言って、キリストを指し示すことができるのです。

そしてもう一つ学ぶことは、ここでフェストとアグリッパとベルニケの3人の誰もが信仰に入らなかったということです。これだけパウロが努力したのにと考えると、私たちはがっかりするかもしれません。しかしこれは逆に大切なことを私たちに確認させてくれるものでもあるでしょう。良い結果が出なかったら、私たちのしたことは失敗だったと言わなければならないのでしょうか。回心者が出なかったのは、パウロのやり方に問題があったからなののでしょうか。そうではないでしょう。人を回心させることまでが私たちの責任に属することではありません。それは神の主権に属することです。私たちに求められていることは主の御言葉を忠実に語ることです。イエス様は前にこう言っておられました。「あなたがたは、わたしのゆえに、総督たちや王たちの前に連れて行かれます。それは、彼らと異邦人たちにあかしをするためです」(マタイ 10 章 18 節)。命じられていることはあかしするということです。パウロがダマスコ途上で主の働きに召された時、アナニヤに告げられた言葉も「あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です」というものでした。パウロは「総督たちや王たちの前であかしする」という任務をここで立派に果たしたのではないのでしょうか。望ましい結果に至らなかったとしても、その逆境の中で立派に責務を果たしたということはこの箇所は語っているのではないのでしょうか。その彼の姿に励まされて、私たちもそれぞれの置かれた場所で、たとえ思うような結果に至らなくても、主の働きに励むように、とこの箇所は私たちに促しているのではないのでしょうか。私たちにとって大切なことは、命じられている務めを果たすことです。この私という存在を通して主をあかしするということです。その時に主は良くやった！と評価してくださる。立派に戦ったパウロの姿に励まされて、私たちも自らの置かれたところでの歩みを導かれないと思

います。彼のように「わたしの願うことは、皆さんが私のようになったださることで
す。」と言える信仰に常に立たせていただき、キリストこそを日々喜びとし、そのキリス
トを指し示す歩みへ導かれて行きたいと思います。